



広安里 第3号

発行 釜山日本人学校
釜山広域市水営区民楽路19番道11
TEL 051-753-4166
FAX 051-756-4851
<http://user.chollian.net/~pusjpnsc>

「常在戦場」 じょうざいせんじょう

釜山日本人学校PTA会長 廣田 修司

本年度からPTA会長を務めさせていただいております、廣田修司と申します。非力非才ではありますが、学校、PTA会員のため、何より子供達のために頑張っていきたいと思っております。

簡単に自己紹介させていただきます。出身は新潟県十日町市となります。十日町市は豪雪地帯として有名なので、ご存じの方もおられるかもしれませんが、私の田舎は、平成の大合併により十日町市に編入された中里村という、人口約6,000人の田舎です。本当に「山の中」でありまして、4月にも関わらず雪が降ったりもします。そのような田舎ですので、私が通っていた小学校は、全児童合わせても40人位しかおらず、私自身も小学校時代は複式学級で学びました。私の母校は、10数年前に廃校になってしまいましたが、昨年ここ釜山に赴任し、釜山日本人学校で自分の子供が、複式学級で学んでいるのを見ますと、本当に感慨深いものがあります。少人数教育や複式学級については、長短あるかと思いますが、個人的には、小学校時代少人数で過ごしたことは良かったと感じています。

今回は、郷土、越後長岡藩の藩風・藩訓「常在戦場」について紹介したいと思います。

越後長岡藩と言えば、司馬遼太郎の小説「峠」の主人公である「河井継之助」や「米百俵」の「小林虎三郎」が有名ですが、いずれもこの「常在戦場」を精神規範としていたそうです。また、同じ長岡出身である連合艦隊司令長官「山本五十六」も「常在戦場」を座右の銘としていたそうです。

この「常在戦場」とは、読んで字の如く「常に戦場にいるという気持ちを持って生き、物事に当たる」という意味です。人間生きていく中で、突発的にいろいろな事が発生する。「まさか」と思う予想もしないことが発生する場合があります。このような時に少しでも気の緩みや甘さがあると、事態は一気に悪化の一途をたどる。そうならないためにも、常に戦場にいる位の緊張感を持って生活をなささいという意味です。

普段の生活で、戦場にいるほどの緊張感を持つことは無理です。ただ、日頃の活動や仕事をする中で、心の平常心を保ちながら、何が発生してもたじろがないよう、最低限の緊張感を持ち、常に最悪の事態を想定しておくことは大事だと思います。実際に事案が発生した際の対応力（瞬発力）が違ってくると思うのです。

私自身、まだまだ「常在戦場」の境地に達しておりませんが、PTA会長として、この「常在戦場」を胸に刻み、子供達の学業や活動に万が一がないように学校と協力しながら活動していきたいと思っております。



(中里清津スキー場)

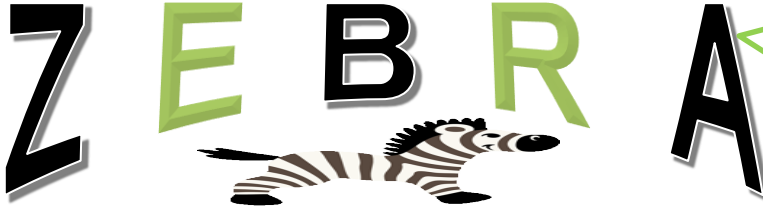


(長岡城を模した長岡郷土資料館)

学級の窓

中学部3年生

学級目標



「周囲をよく見渡しつつ、今、自分は何をするべきか、どうあるべきか意識できる」クラスにしていこうと、みんな決めました。

中学部3年生の目指す生徒像

- 謙虚さを持ち、協調性と主体性を持って行動できる生徒
- 規則・ルールをしっかり守り、社会においても責任ある言動のできる生徒
- 将来を意識し、自らの進路適性をふまえて、計画的に行動できる生徒

学級では、こんな取り組みをしています

今月の目標

月初めに、学校の生活目標に基づき、学級でめあてを決めています。日頃の生活を振り返り、普段から心がけること、行動するべきことを決めて生活しています。

今日のめあて

その日、特に意識して生活することをみんな決めていきます。また、帰りの会で、振り返りを行い、明日からの生活に生かすようにしています。

自己表現活動

道徳などの時間を使って、自分の気持ちや考えを表現する機会を多く設けています。自身の気持ちを整理したり、仲間のことを理解したりする場を大事にしています。

学級紹介

中学部3年生の5名は、今年度自分の進路先を決定する大事な時期ということもあり、それぞれが生活面・学習面の目標を持って生活を送っています。また、学活の時間では、1つの作品をクラス全員で作ったり、休み時間には、みんなで仲良くジェンガやトランプに取り組んだりしています。学級目標の由来にもあるように、この1年、周囲をよく見渡しながら、自分のやるべきことに各々が集中できるクラスにしていきたいと思っています。



今年度の学習面・生活面の目標

- ・ 1・2年生の復習をし、特に数学の問題を早く解けるようにする。委員長として、今までで1番良かったと思える委員会にする。
- ・ 家庭学習に集中して取り組む。生活リズムを整え、安定した生活を送る。
- ・ 復習しやすいノートづくりに努める。最高学年として小学生の手本になれるような行動をとる。
- ・ 1学期の期末考査では、自分の目標点に達成するために、授業・家庭学習を頑張る。ナザレ園実行委員としてしっかり励む。
- ・ 1・2年生の復習をしっかりとし、習ったところを繰り返し勉強する。自分の仕事に責任を持ち、最後までやりきる。

本の不思議な力

教諭 岡崎 純子

読書好きの方も多いことと思います。釜山日本人学校では、読書に力を入れる読書週間が来月あります。そこで、本のお不思議な力について書いてみようと思います。

話が古いものになりますが、1969年アポロ11号がアメリカから打ち上げられて、初めて月に着陸しました。日本でもテレビでその模様が放映され、多くの方が、興奮してその様子を見守りました。私もその一人です。このアポロ11号を打ち上げたロケットを造ったのはブラウン博士、また、このロケットの打ち上げが行われたケネディ宇宙センターの所長はデビュース博士でした。

アメリカでは、ブラウン、デビュースのコンビを中心に、ロケットの研究が進められました。一方旧ソビエト連邦では、チオルコフスキー博士によって、研究が進められました。さあ、どちらが先に月面着陸を果たすのか、世界中の人々がかたずを飲んで見守っていました。

このロケット競争にアメリカは一步先んじたわけです。その後、間もなく旧ソビエト連邦も成功し、アメリカと旧ソ連は競争して宇宙への扉を開いていきました。

本に関係のない話のようですが、ここで興味深いのは、アメリカのロケット研究の中心ブラウン博士と、旧ソ連のロケット研究の基礎を築いたチオルコフスキー博士とが少年時代に同じ本を読んでいたことです。それは、ベルヌの『月世界旅行』です。今でも愛読者の絶えない本です。後の二人のロケット博士が、全く別々の国で、全然別の場所で、同じ本を読み、月の世界にあこがれ、胸をおどらせて、それを自らの生涯の仕事にしたのです。1冊の本の力の大きさに本当に驚きます。

ドイツの考古学者、ハインリッヒ・シュリーマンという人をご存じの人も多いことでしょう。トロイアの遺跡を発見したことで有名です。

シュリーマンが八歳のとき、父親からクリスマスプレゼントに1冊の本をもらいました。ギリシャの古い物語の絵本です。ホメロスの詩がもとになっています。彼はこの物語にひきつけられ、何度も何度も読み返し、そのうち絵本では物足りなくなると、大人の難しい本を読みました。そして、父親にこれは想像を書いたものだといくら言われても、いや、この戦いは世界のどこかで実際にあったのだ、いつかこのトロイアの戦いのあとを捜しあてると、強く決心しました。

彼はいろいろな職業につきながら、考古学を勉強し、多くの国の言語を学びました。そして、長い準備と苦勞の末、ついにトロイアの遺跡を発見するのです。ここにも1冊の本が強く影響しています。

最後に、私自身の話で恐縮ですが、中学校1年生のときに、イギリスのシャーロット・ブロンテの書いた『ジェーン・エア』という本を読んで大変感動しました。孤児ジェーンが独力で自分の人生を切り開いていく物語です。何度も読み返しているうち英語で読んでみたくなり、当時文通していたアメリカの少女に本を送ってもらい、辞書を片手に読みました。物語と同時に作者の生き方にもひかれ、いつかイギリスのブロンテの生家を訪れヒースの茂る丘を歩いてみたいと切望しました。40年以上かかりましたが、4年前その願いを叶えました。

今は博物館になっている生家を思う存分見学し、ヒースの生えていた丘をゆっくりと散歩しました。子ども時代の感動が長い時を経て、遠くイギリスまで私を連れていきました。

このように、本は不思議な強い力を持っているように思います。

いろいろな本を読み、本を生かしていけたらと思います。

